
風の錬金術師

最焉 終

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

風の錬金術師

【Zコード】

Z4896X

【作者名】

最焉 終

【あらすじ】

突然だった。小説によくある感じの死に方だった。といつかまさか僕のように普通でそこらへんにいる高校生の人生が何も成さずに終わっていくとは思いもよらなかつた。いや、何も成さずなどとおこがましい事など言つてはならないのかも知れない。そのような人間は「じるじる」といふだらう。

事故、事件、自殺、病気、寿命・・・はないかも知れないかな。将来に何かを成すであろう人間がいたかも知れない。だが、そのような事例も『「しうがなかつた』のかもしれない。

せいで

運命などと呼ばれるクソったれなモノの

初投稿です。100%趣味で執筆していますので、感想などは受け付けておりません。あしからず。

第0話 死（前書き）

はじめまして。

駄文ですが読んでもらえたら幸いです。

いかんせん初めてなのでどのような感想を抱かれるかは分かりませんが、あらすじにも書いた通り感想等は受け付けておりません。

プロローグ 第0話 死 です。
どうぞ。

第0話 死

「… うるさいな。何でこんなにうるさいんだ。僕を起こすため
タイマーつるさいな。」

「そんなことのためにわざわざ6時にそんな騒音を鳴らすのか。」苦
労なこつた。そんな仕事やめちまえ。あははは。

「… いかん、まだボーッとしてるな。さつやと顔を洗うか」

「そう咳き一階へ下りる。僕の家は一階建てなのだ。

顔を洗い頭を起動させると鏡に向かって、

「おはよー」

「… なんて喋つてみる。自分でも馬鹿らしことは思つがこれも日課にな
りつつある。… 大丈夫かな、僕。

「お腹減ったな。… 朝飯」

「家に親はいない。死んだ… 訳ではない。何かしら仕事があるら
しい。」

何かは知らないが、知ろうとはしたが親に聞いてもはぐらかされて
しまつた。それ以来聞いたことがない。だから朝も夜も休日の昼の
ご飯は一人つきりだ。最後に見たのは… 3ヶ月ほど前かな。元
気にしてるかな。

連絡は時々くるんだが。

「いただきます」

これも習慣だ。家が静かで自分以外に人がいないからかな。寂しく感じてしまう。だが、もう慣れてしまった。今じゃあこれが普通だとも思える。

גְּדוֹלָה מִלְּאָמָר

言ひまでもなくこれも習慣だ。

制服に着替えて家を出る。向かうはもちろん学校だ。制服に着替えて向かう場所など決まりきっている。・・・例外はいるだろうが。

「いつにやがれ」

挨拶は大事だ。

学校に着いた。教室に入るともう半数ほどの生徒がいた。他クラスにいる人もいるんだろうなとか思いながら誰が入ってきたかを確認する視線を流しながら席に向かう。当然、話しかけてくる友達などいるはずもない。

「へりつなどとも思わないが。

しばらくして名前も覚えていない担任が入つてくると連絡事項を告げてさつと出て行つてしまつた。当たり前だ、授業があるのでから。

1 時間目現代社会

通称現社。なんて呼びやすい通称だろうか。現社といふ言葉の響きは嫌いじゃない。現社の授業自体は嫌いだけど。

2時間目 英語

詳しく述べとイギリス語。嫌いだ。僕は即効で寝た。

3時間目 国語

好きでも嫌いでもない。つまり何も言つことはない。普通に受けた。

4時間目 数学

一番好きな科目だ。公式とその応用を知つていればたいていの問題は楽勝だ。教科書を読んでいれば問題ないと思われる。

昼休み・昼食

体育がある日と日直の日以外で僕が席を立つことはあまりない、皆無とさえ言える。そんな僕が売店に行くなどありえないし（弁当を持参）友達と机をくつづけて一緒に食べることもない（これは言うまでも無く友達などいないから）しかし近くで見せびらかすかのような動きで（動かしている本人はそんなことは思つていません）くつつけようとしている。殺したいほど妬ましい。

5時間目 化学

化学と科学の違いは何？・・・なんだろう。眞になる。

6時間目・・・は無い。月曜日は5時間授業でそのまま担任が来てやるならとなる。なんて優しい学校なんだ。ほかの学校ではこうはいか無いだろ？（憶測）

部活にはもはや言つ必要も無からつと思われるが当然入つていない。いつてきますと言つたならこの言葉を言つのは当然と言える。

「ただいま」

と。

学校から帰つても何もすることはない。宿題も無いし、テレビでも見るか。

カチッ ワー ワー ワー ワー ワー ワー ワー ワー

野球は好きじゃない。

カチッ ワイワイキヤツキヤ

教育番組・・・あのアルファベット3文字は出しちゃダメだな、変えよう。

その後もチャンネルを回してみるが面白くものは無かつた。

どうしようか。家にパソコンはあるかゲームをえない。金が無いわけではない。逆に結構あるほうだ。自分で稼いだお金ではないが。親が通帳に振り込んでくれているのだ。なんて優しい両親だ。

今の当たり前は中学に入つてからだつた。いや、時々いなくなつたりし始めたのは小学四年になつてからだつたか。そのころから部活には入つてはいなかつた。面倒くさかつたわけじゃあなかつた。じやあ何故かつて？

答えは単純明快”おもしろくなさそうだつたから”だ。きめ付けだ。これほど単純な答えなどあるまい。

「おうと、もうことなじかんか・・・」

お風呂に入らなくては。“え？ 晩飯はどうしたんだつて？ そんなものはとつぐに済ませたわーまあ、僕はそこまで食べるほうじゃないから昨日の残りを温めて食べただけなんだけどね。

お風呂に入った。お風呂ほど快適なものは無いね。・・・自分が

かな。

僕は早寝早起きだからさつさと寝てしまう。

部活をやつてないと便利だな。自由時間がいっぱいだ。筋トレなんかしてないし、頭もそこまで良いとは言い難いので自分の将来について人生というものについて深く考えたことは無い。考えるだけ無駄つてやつさ。

心残りがあるとすれば、お母さんとお父さんの仕事が何なのか分からなかつたことぐらいか。

急に眠くなってきたな。これまでの人生でこれほど眠いと思つたことは無い。僕はすぐに眠つた。

今日の1日も何かが起こつたわけでもないし宇宙からの家出少女が来たわけでもなれば黒い死装束を着た死神が出たわけでもでかい悪霊が出たわけでもないし緑色の侵略者が来たわけでも無くましてや自分が死ぬなんてことも起こりえたりもしなかつた。

第0話 死（後書き）

サブタイトルに『死』って書いてるくせに主人公らしき人物死んで無いじゃん！とか

長つ！と思つた人「めんなさい。ちゃんと転生までいきたいと思ひます。

次は 第0話 夢 になると思われます。

ここまで読んでいただき本当にありがとうございました。

第0話 夢（前書き）

このような小説に興味を持つてくださいありがとうございました。
チラッと見てくれただけでもうれしいです。
僕の気が向いたら更新されるかもしれません。
第0話 夢 どうぞ。

とこの夢を見た。

あれ、おかしいな。何であんな現実のような夢を見ているんだろう。
なんだろう今の夢は。

まるで僕が本来繰り返すはずだった月曜日のようではないか。
それは無い。絶対に無い。もうあんな毎日を暮らすことは無い。この命に誓つて言える。・・・?

ああ、しまつた。命に誓うことはもうできなかつたな。自覚しているはずなのになぜこつまで現実味が無いんだろう。

僕が日曜日に死んでしまってい
るという事実に。

何で僕は死んだんだっけ。確か、胸が痛み出したと思つたら、急に目の前が暗くなり始めて目の前にはいつの間にか床が見えてたっけ。まさか心臓発作とか呼ばれる類の心臓病か？

でもその日は別にいつまでも二つの休日だったはずだよなあ。
いつも二つとも起きて適当に毎飯を食べて午後にはDVD観賞と
洒落込んでて……。

夜中になつたのも忘れるほど没頭していく気がついたらもう午後8時だつたんだよなあ。

また適当に晩飯食べて風呂に入つて髪を乾かしてさあ、寝ようかなつて時に胸が痛み出したんだっけ。

そういうえばまだあのDVDの最後の場面見てないよー。ま、いつか。いまさら悔やんでも遅いし。

あーあ。人生の最後があの日だつて分かつてたなら告白の一つでもしてたつていうのに。

まあ、別に特別好きな人がいるつてわけでもないんだけどね。

~~~~~

さて、さつきから僕は辺り一面真っ白な空間に漂つてゐる。今自分が立つてゐるのか分からぬ。

分からぬから漂つてゐる、と表現したんだが・・・どうなるんだろ、僕。

死んだら天国なり地獄なり逝つたりするんだろうけど、本当に天国や地獄があるのかどうかは知らないし、何より僕は今漂つてゐるからどうしようもないんだよな。

てこうかまずこの空間 자체はなんだろう。

天国かな。真っ白だし。でも僕のイメージだとこう、いつぱいいる天使がわーーーってなつてゐるんじゃないのかな。うーーん、本当にここはどこなんだろう。

さらには疑問があるのが、この『体』なんだよね。僕つて死んだはずなんだけど指で触つた感覚があるつていつのはどういふことなんだろう。疑問に疑問が重なる。

よし、今の状況を整理しよう。今、僕は空間に漂つていて動くことができない。そしてその空間というのが辺り一面真っ白な『世界』。一番の疑問が僕は死んだはずなのに『体』があるといふことだ。

心臓は当然動いてはいない。当たり前だ。僕は死んだんだからな。

・・・?

やつぱりだ。なぜ僕はこうも平然としていられるんだ？まるで僕が生きてさえおらず死んでさえいなしそもそも僕は元から生まれてさえいないみたいだ。

~~~~~

ここまで来て気持ちの整理が済んだ所で最大級の問題に取り組もうじゃないか。

今の今まで意識外に押し出していたが『あれ』に立ち向かわなくてはすべては謎のままだろう。

そう、今の今まで意識外に押し出していたと言つた『あれ』はまさに漫画といつ世界から飛び出てきたかのような現実感の無さだ。『あれ』はまさに漫画『鋼の錬金術師』に出てくる真理の扉といつくりだ。

まさに漫画といつ世界から飛び出てきたかのような現実感の無さだ。認めたくは無かつた。『ああいうもの』は現実に存在しない。それこそまさにあの『世界』の真理だったはずだ。

認めたくは無かつたが認めたくはあった。

そこにも一つ真理の扉にはセットで付いてくるあの『存在』がいるはずだ。

僕の目の前には真理の扉がある。

すると振り返れば当然のことであるで最初からいたよつこ、昔ながらの友達のよつこに言つた。

第0話 夢（後書き）

短いのかな。

いやプロローグとしては長いな。

2時間ぐらいで適当に執筆したので訳の分からぬ部分があるかも
されませんでしたが大目に見ては・・・くれませんよね。

次話は 第0話 転 になると思われます。

ここまで読んでもうれしいです。本当にありがとうございます。
した。

第0話 会（前書き）

実は今テスト2日目です。
テストは諦めた。

そして前回の次回予告的なものを裏切ったみたいですみません。
そのことについてあとがきでちょっと・・・。

第0話 会 です。どうぞ。

いた。

『奴』だ。

どうやら本格的に『奴』に話を聞かなければいけないようだ。僕の疑問を晴らすためにも。

『初めまして・・・といふべきかな？そして予想通りの結果にがっかりしているのかな？まあ、君が思っているであろう事は大体はあつてると思うよ。ここは“鋼の鍊金術の世界”の真理の扉のある空間を元に再現している。君との交渉を手早く済ませるために創つたんだぜ。感謝しろよな。君に対する説明を円滑に進めるために作ったとも言える。今の君の疑問も大体想像できるよ。

“なぜ自分は死んだのか”

そして“死んだはずなのに自分の体がこの空間にあるのか”

さらにもう一つ感覚があるのか

さらにさらにそんな状況下であるとこうのに“なぜ自分は平然としていられるのか”

君の疑問はその四つのはずだ。』

なんだ『こいつ』は。まるで僕の心を覗き見したかのよつて的確に突いてくる。

それに原作で『じいづ』は『じいづ』で喋ったつけ?

・・・いや例は一つしかないから決め付けはよくないよね。うん。

「それで『さみ』はいったい“何”なんなの?」

『フフシ。お決まりのあの言葉をいつて欲しいのかい? いいだろ? 全身全靈を持つてして言わせてもらひつよ。じいづほん。

オレは君達が“世界”と呼ぶ存在

あるいは“宇宙”

あるいは“神”

あるいは“真理”

あるいは“全”

あるいは“一”

だが、オレは君ではない。』

「え・・・?」

原作では『そして、オレは“おまえ”だ』なんてことをいつていたはずなんだけど・・・。

しかし・・・。どうか。“原作では”か。なるほど。じゅあいの空間

は本当に説明のためだけにこの空間を創つた訳であつて本質はまた別物つてわけなのか。

『オレが君でない理由。それは単純なほど簡単だ。君が・・・君で
あるからだ。』

「いつこう時つてどういつ反応を取ればいいんだろ?」まさかボケつてわけじやないよね。こんなシリアルなときに自分から雰囲気ぶち壊す奴なんていないつて。ありえないよ、ありえない。

『言つておぐが別にボケたわけじやないからな。そのまゝの事を言つておうか、どう? オ、イヤ。

僕が僕であるから『奴』は僕じゃない。それが指す意味は・・・

「つまり地球という名の“世界”的僕という存在をそのまま魂」と
ここに持ってきたって事？それも僕が死んだ瞬間に。」

『そのとーーーり！だから君は体を触った時に触ったという感覚が表れるのさ。』

「だけど・・・なんで?」

『じゃないと世界が滅びるのさ。』

説明を要求する。話がぶつ飛びすぎ。

『ああ、すまない。説明を端折り過ぎたな。だが、説明するのも一

苦労だな。うーむ。そうだな、

君の究極的な疑問“なぜ自分はこの状況下で平然としているの
か”というものがあったな。』

「それが、どう関係するのぞ。」

『つまり、君は死ぬはずではなかつた。いや、それ以前に君は元々
生まれるはずでもなかつたんだ。』

「え・・・?」

『だから君が生まれるという事実は本当は“運命”には無かつたん
だ。もちろん生まれるはずではなかつたんだから死ぬはずではなか
つたところは当然のことだ。』

「運・・・命。だけど、生まれるはずではなかつたところのならこ
の僕の記憶にあるお父さんとお母さんの存在はどうなるんだ?僕が
そんな存在ならお父さんとお母さんは何者なの?」

『お父さんとお母さん?お前に父親、母親がいるわけがないだろ?。
生まれるはずがなかつたんだから産む存在がいるわけがない。』

『だけど、生まれるはずではなかつたと言つのなら僕は地球と書つ
“世界”に生まれたという証明になるはずだよ。』

『確かに証明にはなる。が、証明になるのであれば君が生まれるは
ずではなかつたという証明にもなる。なにより生まれるはずではな
かつたというのに生まれてしまつたから今こつやつて話し合つてい
るんだ。それに君は父親と母親がいることを記憶として知つている
ようだが何を根拠に言つてるんだ?』

会話したことがあるから? 通帳に金が振り込まれていたから? その存在を見たことがあるから? そしてそれすべてが記憶として存在しているから?』

「そうだよ。僕にはそんな記憶がある。だから僕にお父さんとお母さんはいたんだ。」

『・・・なぜ君は自分の記憶を疑うことを知らないんだ。自分の記憶は虚構だと思つことができないんだ? いや、思つていながらそんなことを言つんだろう?』

自分ではもはや氣づいていたはずだ。確信していたはずだ。この空間でオレと話していたときから。否、この空間で漂っていたときから。

否否、地球という“世界”で暮らしていた時から君はもう氣づいていたはずだ。違うか?』

その通りだった。たしかに氣づいていた。

自分の記憶に3ヶ月前に“会話をした”といつのはあった。しかし、それ以前から不自然ではあった。

自分の暮らしが、自分自身が自然であるといつ事に普通であるという事 자체が不自然だった。なにより、頼つてきた記憶が小学校のときの記憶がまったくもつて曖昧だった。皆無だったといって良い。

小学校のときの記憶といつのはあまり覚えてはいないものだけど何もなかったといつことほど不自然なものはない。

僕の“当たり前”は中学校からだ。つまりは・・・いつもことじだ。

「やつぱつ君の言つとおつ僕に親はいなかつた。そつことじとなの?』

『そういうことなの。』

「そして、その原因が“運命”とか言う不確定要素なものなんだ…。
・。」

『君は運命というものを信じない方かい？まあ、人それぞれだからな。押し付けてもしようがない。だがしかしすべての物事に偶然などありはしない。すべてはそうであるように、そうであるために時は刻まれていく。それが“運命”というものだ。』

だが“運命”が君という存在を確立出来ていなかつたために地球は破滅の道を進むことになる。』

「ど、どうして…？」

『人間の生命エネルギーというものは存外なまでに膨大だ。君という存在を確立出来ていなかつたために君という存在の時が刻まれていなかつたのさ。そのため、君の…君であった時の生命エネルギー及び後世生命エネルギーが死亡と同時に噴出し始め膨張しいわゆるの爆弾へと変貌していくはずだつたのさ。』

「もし僕という存在をこの場所に呼んでいなかつたら地球はその頃どうなつていたの？」

『その時の生命エネルギーは計りしれないだつたらうからなあ…。地球の半分が消し飛んでいたのは間違いないだろうな。』

「う、嘘…。」

『嘘なもんかよ。僕が張つてなきや危なかつたぜ？何せ後1秒遅か

• .

『やつと本題に入るぜ。そこでだな。お前転生してみる気は無いか？』

「え？？」

転
・
・
・
生
・
・
・
?

第0話 会（後書き）

長く感じられたので転生は次話になると思われます。
すみません。

次話こそ 第0話 転 になります。絶対にして見せます。
ここまで読んでくださってありがとうございました。

第0話 転（前書き）

早く転生させたいですね。

転生しても原作に介入するのは遅くなりそうですが。

そして今日はなんと投稿する時間が無かつたという事態。

もう1-2時過ぎてる。

笑えない。

第0話 転 どうぞ。

第0話 転

「転……生？ 転生といつと輪廻転生かな。 なんで急にそんな話を持ち出したの？」

『さつきも言ったがここはオレが創った空間であつてお前をここに置いてはおけない。 君は輪廻転生と言つたが厳密には輪廻転生とは言えない。 君はもはやいな存在だからな。』

「断つたら、どうなるの？」

『君が断るのであればその体は地球に戻すしかない。 そうなれば今度こそ地球は消えてなくなるだろ。』

「……もともと僕には選択肢はないんだね。」

『そのとおり。 君が地球に住まう全人類を助けたいのであれば君に“断る”という選択肢は無く承諾するしかないわけだ。』

「だけど僕が転生などできるはずがないよ。 前科があるからね。」

『……？ 前科？ 何を言つているんだ？』

「僕はいわば地球といつに不法入国したよつなものだよね。 だから僕はここにいる。」

『確かにその通りだが……。』

「だつたら

『しかし別に君が地球に転生する必要はないぜ?』

「……え?」

『異世界転生、と呼ばれるものだな。知らないだらうから教えてやるけど君がこの空間に来れたのはあの扉をくぐつてきたからだぜ?』

まあ、それは想像はついていた。

当然だ。この空間の唯一の出入り口はあの扉だけだ。

『あの世界はどんな世界にも通じている。オレがそういう概念を与えたからだが。しかし、鋼の鍊金術師という“世界”をモデルにした所為か今は（・・）その“世界”にしか通じていない。』

「今は（・・）なんだね・・・。」

『そう今は（・・）だ。それで?まだ明確な答えはもうつてないな。どうするんだい?転生するか、しないか。まあ、答えは決まっているんだろうが。』

「・・・うん。転生する。いや、してあげる。地球の全人類の為に。・・・だけど。」

『だけど?』

「僕がそんな“世界”に転生しても生きていけるかはわからないよ?何より転生した場所がどんなところになるかわからないよ?それに僕には力なんて無いし転生したと同時に“僕”という確立した自己は消失するはずだよ。」

『それは無いな。言つたはずだ。輪廻転生ではなく異世界転生だと。君は転生し君として生きていくん。そのためなら力だつてあげちゃうぜ。といふか忘れたのかい？君はあの扉から転生していく。そのうえあれは真理の扉だ。意味は分かるだろ？』

「つまり僕は転生したと同時に真理を手に入れることができるとこ
うわけだ。」

『そういうこと。だが・・・あまり手合わ鍊成はしない方がいいだ
うつな。田をつけられる可能性が高い。』

そうか。あの世界の親玉は神を取り込むため真理を見た人間を人柱
にしていたからね。

でも、それならどうせ異世界転生をするんだつたら・・・。

「ねえ、僕からお願ひがあるんだ。聞いてもらえる？」

『ああ、良いぜ。何でも言つてみな。出来る限りでな。』

「僕は・・・創造と生成の力が欲しいんだ。」

『それは・・・難しいな。それはもはや神の域だ。簡単なことじや
ない。』

「いや違うんだ。僕が言いたいのはその世界に応じた創造と生成の
力が欲しいんだ。そして僕は風の力が欲しいんだ。さながら鍊金術
師のように等価交換ということで僕のこの体をあげようじゃないか。
僕にはもはや無縁の体だ。十数年共にしたんだけどね・・・。」

『なるほどそういうことが。・・・いいだろ。あげようじやないか。君のその体をそのための等価交換としてもひつとおくよ。もともと君の体は消えてなくなる予定だったんだがさよりつじ良い。』

「これで僕の体ともおわりばだね。存外に悲しいものだよ。」

『これで君が転生すれば君とこの血筋は存在するが君がいるといつて証拠は消えて無くなるという事だ。それでだ。ものは相談だが君の後世の名前を決めようじやないか。』

「な、名前つて。そこまで考えなくても・・・。大体名前といつのは産まれて決まるものじやないの？」

『ほりょく言つでしょ。子は親を選べないつて。』

『しかし君が言つた言葉だが転生した場所がどんな場所になるか分からないんだぜ？もしかしたらイシュバールとかいう殲滅される民族かもしれない。子は親を選べないんだつたか。だが、再三言つたはずだぜ？これはただの転生ではなく異世界転生だと。フフッ、オレが君の親を選んでやるよ。だからせめて名前をかつ』』よくしょりつば。』

「でも、あの世界の名前は洋名だよね。僕が思つに和名を考えてからほりょく言つて。」

『和名からねえ。ならちょっとは中一臭くつても構いはしないよな。雷鳴轟、とかどうだ？』

「・・・それはない。それはないよ。それはないつて。いやいや、ないない。ありえないつて。今鳥肌立つたよ。びっくりした。勢いあまつて死んじゅうところだつた。・・・いやもう死んでるんだつ

『どうした？ 今呆然としていて急に後ろ向いたとおもつたらうずくまつてぶつぶつ言い始めて。

そんなに今の名前よくなかつたか?』

「うん。」

やつと立ち直れたよ・・・。

・ なら、今の君の状況を名前にしようか。君の状況、それは・

未来が無く、過去さえ無く

未来があるから過去があり

過去があるから未来がある

だが、未来が無いから過去が無く

過去が無しから未来が無し

そんな名前。
すなねち、
過去も無く未来も無い

過ぎ去らず未だ來ることも無い

過去未来無 いや、過去未来奈
会心の出来だらう。 『 なんてどうだらう。 すさむくな

「中一臭い……けど、なんかかっこいいね。気に入ったよ。それで？洋名は？」

『え？いや、過去未来奈を未来奈過去にしてそれを英語にするなり何なりしたら良いと思つよ。

あ、オレのおすすめとしては未来奈はカタカナにしたほうがかっこいいと思うんだ。』

それはそれでアリだとして過去つて英語でなんだろう。

僕の苦手科目だもんな。これだからイギリスは。（イギリスの皆さん）めんなさい。）

『過去は英語で *past*だ。厳密に言えば *the past*だが、*past*で良いはずだ。』

past・・・パスト・・・パステイック・・・とかみみたいな感じかな。

「ミクナ・パステイック・・・パステイール・・・パステイルル・・・パステイララ・・・パステイシア・・・パステイクル・・・パステイクル・・・ミクナ・パステイクル・・・良いんじゃないかな。」

『決まつたか？』

「うん。僕の名前は今からミクナ・パステイクルだ。」

『お、なかなか良いじゃないか。オレも気に入った。んじゃあ、名前も決まつたしな。もうそろそろ行くか。』

「 もへ、か。君で会えなくなると思いつて封じこむ。」

『 ん？ 別で余計と思へばこつでも余計なやつ。』

「 え？ せつなの？ 」

『 ああ。君が望む時間こもたこじて呼んであげるよ。』

「 ・・・なら、原作が終わったらまた僕を呼んでくれる？ 」

『 ああ、良いぜ。大歓迎だ。それじゃあ、またな。』

「 うん。またね。」

それと同時に後ろの扉の開く音が聞こえる。

ガーダガーダガーダガーダ

僕は後ろを向く。

「 うわあ・・・。」

皿玉を見て、ここまで再現しなくともと思こなががらも扉に近づいていく。

闇に飲み込まれていく。『 あいつ』を見て手を振りやる。

『 あいつ』も振り返していく。

そして、ついに、僕は、その空間から、姿を、消した。

第0話 転（後書き）

特に何も書くことはあつません。

名前の事についてとかなに1つ書くことはありませんよ。

ただ1つ言える事は雷鳴轟なんて書いて後悔は少しだけあるって事だけ。

そして今回は少し長めに執筆してしまいましたが転生までいきましたかたつたのが本音です。

次話は第1話 生 かな？

ここまで読んでいただきありがとうございました。

第1話 生（前書き）

テストが返ってくる・・・。
憂鬱です。

そんなのも吹き飛ばして執筆したいと思います。（現実逃避とも

言つ）

第1話 生 です。どうぞ。

第1話 生

僕は親といつものを知らない。

親といつものが分からない。

記憶にあつたものはすべて嘘だとあの空間で指摘された。

思い知られた。

僕はあの世界に誕生することで親といつものを見る事ができるだろつか。

知ることができると願いたい。

~~~~~

僕は気がつけばなにやら液体に囲まれた場所にいた。

確かにこれは僕の記憶が正しければ赤ちゃんが母親のお腹にいるときにだけ存在する、羊水と呼ばれる物ではないかな。

とこつことば今僕がいる場所はお母さんのお腹の中か。

なんだかぞきぞきするよ。僕は本当に真っ当に産まれてくることができるのか。

そう思つていてる感じに“僕”といつもが覚醒したのか、も

うすぐ僕は産まれるようだ。

辺りがなんだか蠢いている。

なんだか新鮮な感覚だ。それが当然か。

うわっ。眩しい。頭が出たのか。

そして、すぐに足も出てきて僕は産まってきた。

産声というものを上げてみた。産声は赤ちゃんが元気だという証拠になるはずだ。

とこうより最初の呼吸というべきか。

それから、へその緒が切られ産湯に浸からせられて体を洗われてタオルで軽く拭かれる。そのままタオルを巻かれ僕を産んだと思わしき人物の横に寝かせられた。

それにして今すんごい眠いよ。本能だらうか。

あー、意識が、飛、ぶ。

その瞬間、僕の耳が隣の人物の声を確かに聞き取った。

「生まれてくれてありがとう。」

という言葉を。

## 第1話 生（後書き）

すいません kirigai のでここで切ります。

まあ、サブタイトルも“生”ですからね。  
次話は第2話 親になる可能性大です。

内容も読めてそうですね。

第0話になつてました。すいません。

短かつたけれどここまで読んでくださつてありがとうございました。

## 第2話 親（前書き）

久しぶりですね。

親にパソコンを没収されてたので更新できませんでした。  
まあ、そこらへんの妬み恨みは置いといで。

第2話 親 です。どうぞ。

僕が誕生して1年が経った。

その1年間は特に語る必要もなく何もする事がなかつた。

ただ、男としての僕のプライドとこうものが悉く涙に溶けて消えていつてしまつた。

ただまあ、今はもうとっくに離乳食になつてはいるんだけどまだちょっとトイレに自分で行くことができない。なので今は立つためにがんばって練習中。

何かを両指して頑張るというのがこんなにも楽しいものとは思わなかつた。

練習のおかげか家中で何かに?まづ立てる時間が長くなつてきた。1秒位だけだけど。

でも歩ける程度までいけてくるからいいんだだけ。

それでもハイハイの方が楽な気がして嫌だ。

それにして、この家の母さんは活動的だ。

どうやら家の裏に畠があるようだ僕が朝6時に起きた時にはもう畠仕事を始めている。

朝6時に起きるのは前世の性か。

洗濯物をたたんであるところを見て床が綺麗なところを見るとすると5時には起きているのかな。

すごいよね。今は水をあげてるだけだけどたぶん鍬で全部耕したんじゃないかな。家の裏といつてもそれなりに広いんだけど。前にやつとキッチンでテーブルに? まつて窓から外を見ようとして見えなかつたものだから仕方なく窓の枠に? まつて外を見ると、何て言えばいいかな。

トマトやら大根やらほうれん草かな? がいっぽい埋まつてたり生つてたり水道の近くに洗うつもりなのかかごに入つてた。ついでといえばなんだけどりんごの木も生つてゐみたいだ。  
すりつぶしてもらつて食べていた時期もあつたがあれは本当に小さい。今はその時期じゃないから生つてはいけない

あれ全部を一人で世話して収穫していると思つてびっくりしたね。うん。

どうやら収穫した野菜は町に売りに行つてゐるらしい。時々それを業者らしき人に頼んで運んでもらつていた。

そんな人物。今この世界でお母さんと呼ぶべき存在。名前を“アラ・パステイクル”お父さんや親しい人はリア、と呼んでゐるらしい。

しかも美人だ。そんな10人の男が10人全員振り返るぐらい美人とは言わないうが半数は振り返るんじゃないかな。そんな人の子供として成長したとき鏡を見るのが楽しみだ。

片やお父さんのほうだがどうやら鍊金術師らしい。1回だけドアが

開けつ放しだつたので侵入してみたところそれらしき本が結構あつた。

しかし、そんなお父さんだが国家鍊金術師を目指しているのかなと思いまやそういうわけではないらしい。どのくらい能力があるのかは分からぬが頭は良いみたいだ。鍊金術師なわけだし。

というかあの人は基本引きこもりでいつも研究の部屋に閉じこもつてゐる。若干怪しく感じないでもない。トイレの時とかにしか出でこない。『ご飯は食べているようだが部屋の中で食べてるみたいだ。集中しすぎて時々食事を忘れていることも多い。

だが、別に人付き合いが悪いわけじゃないらしく知り合いもそれなりにいるよつて物の修理を時々頼まれてしたりするよつた。『ミニマニケーション能力が乏しいだけならしい。

僕が産まれて抱き上げてくれたことは一度も無かつた。生まれてきただことに喜びはあつたようだが。

そんな人物。今のこの世界でお父さんと呼ぶべき存在。名前を“リストレア・パステイクル”お母さんや親しい人はリスト、と呼んでいるらしい。

だが、正直言つて何でこんな人とあんな人がくつつけたのかがよく分からぬ。お父さんは身長は高いが（170は絶対ある）ひょろつて感じで研究ばかりしかしてないから体力なんかあるはずも無く、たぶん100メートルを走りきれないんじやないか？と思つぐらい無いと思つ。

僕も将来鍊金術を勉強しようとは思うけど『奴』もああ言ってたしね。気手合わせ練成は出来るとは思うけど『奴』もああ言ってたしね。気

を付けないと。

・・・今思い出したんだけど今の僕は人間の生命エネルギーの塊の  
ようなものだつたはず。さらに賢者の石の材料は生きた人間。つまり  
僕は賢者の石そのもの？ そう仮定するなら僕は・・・死はない？

## 第2話 親（後書き）

急展開になつてしまつた。どうしよう。

まあ、心配は要りません。

日常パートを書いてみせます。

期待はあまりしないようにしてください。

がつかりするだけですのです。

もともと期待する人がいるかどうかも分かりませんが。

次話は第3話 喫 かもしだせん。

ここまで読んでいただきありがとうございました。

### 第3話 嘸（前書き）

この「じる寒い」です。  
もうすぐ冬ですね。  
そんなことより、  
第3話 嘸 です。じりうい。

戦慄したのは一瞬だった。

が、それだけで思ひ至った。

僕のこの世界から消えるのは“鋼の錬金術師”という物語が終局を迎えたことと同義である。

しかも、再生は自動オートといつわけでもないはず。

なにより怪我をしないように気を付ければいいはずなんだ。

逆に生命エネルギーが減るのは都合がいいはずなんだ。

何も心配は要らない、と思ひ。

今の所は。

~~~~~

とか何とか結論付けて自己完結し終えたのは僕がもう1歳と半年になつてからだつた。

すでにこのこの僕は1人で歩けるようになつトイレにも危なつかしくも1人で出来るようになつた。

やつぱり僕という自己が存在している以上それは当然のことだ。

だが、1番の問題はここからだった。

言葉が分からないんだよね。

僕の英語の能力は最低ランク・・・。

理解できるはずがない。

絵本なんか読んで理解できるものがほとんど無かつたんだ。

さすがに簡単な文字は読めたんだけどそこまでだった。

そんなんでお母さんお父さんの言葉も断片的に端々も分からない。

いつこいつといろでは真理が役に立たないしね。

やはりアメリカンが日本語なんか知っているはずも無いだろう。アメストリス語がたぶん感覚で話してるとだと思つ。

日常で僕や元の世界の日本人が違和感無く日本語を使うよいつの世界のアメストリス人も違和感無く使つていることだらう。

さてここで本題に戻る。

僕がアメストリス語を使つこなすにはどうすればいいのか。

たぶんこのままでは僕は日本語しか喋れない精神異常者的な田で見られてしまう事になるかも・・・。

と、そんなことをお父さんの研究用の部屋で寝転がりながら考へて
いると（僕が静かだからなのかお父さんも気にしてない）ふと一冊
の分厚い本が目に付いた。

『アメストリス語辞典』

僕は戦慄した。戦慄とこうより驚愕した。

何でこんなものがこんなところにあるの？

アメストリス人には必要ないはず。感覚で話しているんだから。

この世界で知られている他の国といえば、『シン』とこう国しかない
はず・・・。

漢文ならまだいけると思つ。

やつてみる価値あり。というかやるしかない。

僕はその本をお父さんの背中を見ながらこの体格ではとてもなく
重い本を抱えながら静かに退出する。

そして便宜上僕の部屋になつた部屋に持ち込みノートとペンを持つ
てきて久しぶりの勉強を始めたのであった。

~~~~~

そしてまた半年後。

つっこいの時がやつてきた。

僕の勉強の成果を。

お父さんとお母さんがいる部屋の前で少し緊張する僕。

そしつこに扉を開く。

お父さんが横目でじらうを見る。

お母さんが微笑を浮かべながらじらうを向く。

両方は当然話すことは出来ないだらうし言葉も理解出来ないだらうと踏んでいるはず。

（今まで“あうー”とか“だーだー”的なことしか発音してないし出来なかつたわけで）

そこで口を開きたゞたゞしくも発音を正しく、叫ぶかのよつた僕の言葉。

聞いて驚け。

「おとうさん。おかあさん。」

僕は初めて、親を呼んだ。

### 第3話 嘸（後書き）

僕は、頑張った。

疲れました。

もう寝ます。

次話は第4話 町になると僕もうれしいんですけどね。  
ここまで読んで頂きありがとうございました。

## 第4話 町（前書き）

再来週の11月の終わりにテストがあるんです。  
更新が出来るかわかりません。

ちょっとやばいんですが・・・何となるはずです。

第4話 町 です。どうぞ。

僕が声に出して喋ったという事実に最初はポカーンとしていたお母さんとお父さんだが最初に起動し始めたのはやっぱりというかなんと言ひか、お母さんだつた。

そして僕に抱きついて

リバクシナ-----.\* @ ..'@ ..@ ..@#\$%&@ +

ちょ、ちょっと待つて。ぐ、首が絞まつてし早口で英語呼ばれて  
もミクナつて呼んだのしか分からなかつたしとにかく離れ

僕が気が付くと一瞬ボーっとしてしまったがどうにソファの上で寝ていていたことに気が付いた。

「けど、だれもいない……。」

時計を見ると、どうやら30分も気を失っていたらしい。

僕もまだ2歳になつたばかりだけど大丈夫かなあ。

お父ちゃんはいつも研究室にいるからしてねんだからしお母ちゃんは  
何しているかな。

とか何とかまだ寝転がつたまま考へていてビーナスアゲ開いた。

「あー、ミクナ。やつと起きたあ。お母さん心配したんだからねえ。

」

「・・・原因はお前じやなかつたか。」

と、お母さんとお父さんが何か話しながら入つてきた。

会話がそこまで早くないためそこそこ聞き取れる。

早口になるとわざりだけじ。

僕の勉強法はとりあえず単語自体を覚えることだけで精一杯で会話などは出来る相手もいなかつたから経験が少なくて着いていけない。前世でも海外旅行などしたこともなかつたしね。

「・・・今日は天氣も良いから昼からでも買い物でもしていくといい。・・・ミクナも初めて喋つた事だしな。」

「うーん、そうね。今日の夜ご飯は豪勢にいきましょうか。ケーキも帰つに買つてしまつよ。」

「・・・楽しみにしてる。」

「・・・? 買い物に行くのかな?」

それにもなんか嬉しそうだ。喋つた事がそんなに嬉しかつたのかな。

「・・・ミクナも一緒に連れて行くといい。・・・出かけるのは初めてだらう。」

「それいいわね。よし、それじゃあミクナ。お皿」飯を食べたら町まで行くわよおー楽しみにしてね。」

と、そのまま鼻歌を歌いながらキッチンに向かいつのむかん。

お父さんは僕の隣に座り近くにあつた新聞を読み始めた。

・・・え？今、僕の記憶が正しければお父さんは一緒に言って来た的な事言つたよね。

・・・・・うわー、初めての町。しかも異世界。ちょっと興奮するなあ。

だけど、どんな町かも分からぬ。原作に出た町に行くとも限らないしなあ。

そうだ。仮になるなら聞けばいいんだ。

「ねえ、お父さん。」

なんか今、すごい真顔で動搖した。

「お母さんが書いたの名前は？」

「・・・町の名前か。・・・この家のすぐ近くにある町は大きいと  
も言えない町だがよくさわやかな風が吹くんだ。・・・風がよく吹  
くことからその町は“ウイントスの町”と呼ばれているんだ。」

ウイン・・・トス。

~~~~~

~~~~~

その後、お飯を食べてお父さんの提案通り町に行くことになつ  
た。

どうやら徒歩で行くらしい。

とこうことせこままで離れてはいない、とこうこととなる。

と、そこで立ち止まり後ろを振り返つてみると・・・

結構大きな家があった。

そういうえばこの家には階段があったなあ。

てことは2階があるはず。

今度行ってみよう。

とか何とか思つていると急に手を握られてびっくりした。

当然握ったのはお母さんだった。

「どうしたの？」

急に立ち止まって自分の家を見てくる」とを不思議に思ったのだろう。

「早く行こう？」

そのまま手を握られたまま歩いていく。

が、

僕の現在の年齢は2才なわけで体格も小さくお母さんの半分ぐらいにしか頭が来ていない。

そんな身長で急に歩かれたら・・・

転ぶわけじゃない。

このお母さんが僕を引っ張った場合は引きずられて腕がーー

「痛い痛い！」

「ああ、」めん！大丈夫？急に引っ張つたりして。」

いや、もう肩が外れやつ。

とこうよつ僕は早く歩き始めたかった。

幸い、お母さんは気付かなかつたからよかつた。

あまりの痛さに僕は・・・日本語で叫んでしまったから。

そして無事に何事もなくウイントスの町に入つたわけだけど・・・。

精神年齢がもう18歳な僕に手をつないで歩くというのはなかなか恥ずかしいものがある。

だけど今の僕の姿は2才。

誕生日はいつもやうやく秋の前半の世界の10~11月ぐらいになると

年数は・・・何年だろう。

この世界は大陸曆とか言う曆だったかな。

後でお父さんに教えてもらおう。

しかし、この町はそこそこ活気がある。

みんなが活き活きしてて毎日が楽しくてしょうがない、といった感じだ。

そんなにぎわつた空間に入つていく僕たち。

実際問題野菜は自家栽培しているので野菜には困らない。

植えてないといつより植えれない野菜や果物は買つてゐるが。

後、お母さんが買つのは肉や服だ。

生憎、僕は特に服にはあまりこだわらない主義なので1週間2週間同じ服を着続けるのはざらだった。

なので僕は服を求めることがない。

お母さんが勝手に買つていくだけ。

それにしてもお母さんは知り合いが多い。

歩いてるだけで至る所から挨拶が来る。

時々お母さんが手を引いてる僕に対してそれっぽい感じに挨拶していく。

だが、正直言つて気持ち悪い。

おつさんが猫なで声出してても気持ち悪いだけだよね。

この町の住人は一体化してみんなで暮らしていくといった感じに見受けられる。

一致団結して今を生きてるといった方がいいかもしない。

今を生きて未来へと歩いていっている。

僕も今を生きる努力をしなくちゃ。

そのためには、この世界の常用語のマスターを図られるければ、

家に帰り僕は少し疲れてのどが渴いたためキッチンに向かった。

と、そこでふとカレンダーを見つけた。

ちようどいいと思い年を見た。

・  
・  
・  
え？

一八八七年

## 第4話 町（後書き）

やっと書き終わった。  
もう寝ます。

おやすみなさい。

ちなみにウイントスは完全にオリジナルです。  
すいません。

次話は第5話 働くになるかもしれないです。  
ここまで読んで頂きありがとうございました。

はい。

## 第5話 働（前書き）

更新をデンドンやつてこさせたいです。

まあ、毎日とはいきませんが。

第5話 働 です。どうぞ。

## 第5話 勵

僕は鋼の鍊金術師がそこそこ好きで一回だけ設定を見た事があった。

僕は記憶力にならそこそこ自身はある方だ。

今の僕の年齢2才。

現在の年は1887年。

つまり僕の誕生日は1885年。

そして僕が驚いた理由は。

とある登場人物と生まれた年が同じ。

それは・・・

焰の鍊金術師 ロイ・マスタン

主人公と一緒にまだ分かる。

意気投合もしやすいだろうし話しやすいかもしれない。

だけど原作開始時が28年後にもなる。

しかし今の僕は賢者の石そのもの言つても過言ではない存在だ。

いつから年をとらなくなるかは分からないけどもし、もし、僕がこ

の家に住んでいくとするのなら僕はこの家じこのか町にすら、いることは許されぬ」とはないだらう。

そんな僕の将来が三十路決定した1年後。

特になんの代わり映えもしない毎日が過ぎていった。

あの後 僕は老えた

後々に起じる」とに対応できる時間がたっぷりできた。

と、前向きな事を語り、前進する事が出来た。

さらに将来を見据えるとなると鍊金術の習得を早めなれば・・・。

そんな僕もいまや3才だ。

3才な僕が今やっていることはお母さんの畠仕事の手伝いだ。

なぜそんなことをしているのかと云うとただ単純に僕が暇だったのと少しでも筋力アップのほうも図つていきたいと思つたから。

実際は3才の僕には出来る事が少ないのでお小遣いも貰えるので一石二鳥だ。

「僕は町に行きいわゆるの商店街っぽいところで店を出している。おひちやんたちのお手伝いをしている。」

荷物運びを優先的にがんばっている。

日常的に体を鍛えてはいるがどうしても体が3才でしかないので肉体のスペックが悲しかる。

精進せねば。

と、そこである日突然お母さんが寝込んでしまった。

別に何か流行り病があつてそのままなすすべなく死んでしまうわけでもないし余命はあと1年ですとか医者に宣告された訳でもなくただ単なる風邪である。

明後日位こな治るだらうとのことだった。

ただ熱は37度を超えてるので結構きつこと細つただごんとベッドから降りようとするのだ。

だけどさくべにお父さんが起きよつとお母さんを寝わせる。

「・・・起きるな。・・・今日はゆっくり寝てこな。」

「でも、畠もあるし洗濯や、飯の用意もしないと・・・」

「・・・俺とミクナに任せとおけ。・・・だから早く寝る。」

「ヤレ」まだ言ひないうおととなしく素直に従うナビ・・・本当に大丈夫なのよね?」

「・・・心配せずとも大丈夫だ。」

「うん、わかった。『めんなさい』ね。おやすみ。」

「・・・おやすみ」

そしてお母さんはすぐに寝入ってしまった。

~~~~~

僕は初めに畑に水をやることから始めた。

これだけでも結構疲れるんだけど気にしない。

次に虫とか何とかを探しては引っ張りながら投げる。

軍手をしているのでそこまで汚くない。

その次に収穫できそうな野菜を全部かごに入れていく。

しかしこの前も採つていったので熟れていたのはそんなに採れなかつた。

そんなこんなで畑仕事をしていた時お父さんが一いつぱりに向かってきました。

なんだかうつと思つてみるとお父さんが

「・・・そろそろ飯だ。・・・」飯を作つたから一日休止して食べ

に来い。」

え・・・。なんですか。

「お父さんが・・・作ったの?」

「・・・わつだが・・・何か文句でもあるか。」

ちよつと不機嫌そうになるお父さん。

意外そうに見られるのが嫌なんだわ。

「そんなわけないよ。楽しみだよ。」

と言つて農具を片付けキッチンに向かつた。

かるとこそこには本当に意外なほどおいしそうな感じの料理があつた。

そのまま席に着き恐る恐ると言つた感じで小さな器に盛られたカレーと思わしき料理をスプーンですくい口に運ぶ。

パクッ もぐもぐもぐ

おいしかった。

お母さんと比べては失礼だが食べれないわけでもなく素直においしかった。

ちよつとからじーっと見てきて少し不安そうな表情を浮かべるお父さん

「おこしよ。」

と言つと

「・・・やうか。」

と言つたつやうり黙つて自分で作った料理を食べ始めた。

少し経つて僕が食べ終わつて畠仕事の続きをしにいこうと思つて意外に向かおうとしたときにお父さんが唐突に僕に向かつていつと言つた。

「・・・ミクナ。・・・お前、鍊金術に興味はないか?」

第5話 働（後書き）

シチューがあるならカレーもあるはず。
・・・急にすみません。

特に僕はあまりネタバレするつもりはありません。
次話の内容は当然決まっていますが。

次話は第6話 学に決まりだ！

ここまで読んで頂きありがとうございました。

第6話 学（前書き）

この「じゅるマインスイーパー」にはまつてしまつた。
慣れてくると簡単になつてくるものですねー。
第6話 学 です。どうぞ。

“
鍊金術
”

それは目に見える事がない大きな流れつまりは世界や宇宙など呼ばれるもの、それを「全」とするならば

人間やそのほかの生き物の1人1人1匹1匹はその大きな流れに流れ
され続ける「一」である。

『全の母のつまら』

しかし、その「全」も「一」が集まり集束し、一緒に流れが存在する。

この世界はとてもではないが考えられない法則により流され続けていふ。

その流れを知り理解し分解して再構築する。

それが“鍊金術”

ただし僕がこの世界においてその流れに上手く流れているかは分からぬけど。

唐突な話に戸惑う僕。

だが顔に出してはいけない。

3才かそこいらへんの子供が鍊金術だなんてものを知っている風な感じの感情は押しとどめておくに限る。

だから僕は至つて自然に疑問を持つかのよひに答える。

「れんきんじゅつってなあに？」

イントネーションをたどたびじくするのが大事だ。

「・・・ついて來い。」

そつまつものだからついて行くと着いたのはお父さんの研究室だった。

そのまま入つていくので一緒に入る。

相変わらず本があたりに散らばっている部屋だ。

片付けよつとは・・・しないだろうね。

そんなことを思つてお父さんが手招きするので机の側に寄り近くの木のいすによじ登ると何やら本を見ながら紙に何か書いていふようだつた。

覗き込んでみるとそこには・・・円がありその中に複雑な模様を書くと次に文字を書き込んでいく。

そして書き終わったのかそのまま本を閉じこちらに目をチラツと見るとおもむろにポケットに手を突っ込むと僕を唇ご飯を食べるため呼びに来た時に拾っていたのか何やらちようど今の僕の手の拳大の石を取り出すと練成陣と思われる陣の中心に置く。

そして壁に手を合わせると練成反応の光が発生した。

僕が初めて異世界の証拠（しかもファンタジー）の超常現象を見た瞬間だつた。

練成反応が終わると練成陣を書いた紙の上には鉄のものと思われる光沢を持つた物質と少し小さくなつた石の2つがあつた。

「タラレバ」

と、僕は素直に本音を言つていた。

当然と言える。

から。
鍊金術なんてものは前世の世界では地球がたとえひっくり返らうとも回転軸が真っ直ぐにならうとも絶対にありえることではなかつた

「……今のは石に含まれていた砂鉄をすべて分解しここに再構築した。」

とお父さんは言つが本心では「理解はできていないだろつが」とか思つてゐるんだらうなあ。

当たり前だ。

お父さんから見て今の僕はただの3才のおとなしさ過ぎるところに
い子供だ。

だから」「興味はないか?」などと書かれたのかもしない。

興味? あるに決まっている。

超常現象、魔法、オカルトは男の夢だからね。

憧れるのも無理はない。もしかしたら僕だけかもしれないけど。

無意識に僕の耳はキラキラ光っていたらしくお父さんは誰かに耳鳴
するかのようだ。

「・・・さすが俺とリアの息子だ。」

と呟いた。

お父さんも夢だったのか・・・。

まあ、この世界でも鍊金術師はそんなにかへはないいらしくしね。

そして僕がどうやって鍊金術を学ぶかを思案してみると

「・・・ミクナ、これ貸してやる。」

やつぱり口を開いていた本を僕に渡してきた。

「え?」

僕は驚いた。

何故か？

言つまでもなく3才な僕に鍊金術の「こと」に関して師事することはないだろう、と思つていたからだ。

「・・・ その本を読み続けれ。・・・ 1ページ1ページが擦り切れ
るほどまで読み続けれ。・・・ そつすれば俺はお前に師事してやる。

L

理解しているとは思つてもいないうから僕が本を受け取ったことで興味を持つてくれたとでも思つていいのだろう。

僕はお父さんのその思いに答えるつもりだ。

113

突然だが少し考えて欲しい。

今の僕の精神年齢は18歳だ。

そんな僕が男の夢と呼べるもの源を僕が手に入れて僕がただ読む
だけで終わると思うだろうか。

答えは当然の如く否だ。

あの日から2日後お母さんが復活したといひで僕はいつも通りの毎

田に戻る。

いつもは町に行きおじちゃんたちの手伝いをするのだけど今日は休みだ。

すなわち今の僕は16時間の自由時間がある。

読書が趣味の僕にかかるほどんに分厚い本でも1日あれば読みきれる。

だけど読みきれるだけで完全な理解はしていない。

記憶力には定評のある僕にかかるばある程度の単語は覚える事が出来る。

そこで僕は決して焦らず仕事が終わればすぐに家に帰り少しづつ理解を深めていった。

だが結果として1週間でそれのすべてではないけど8割がたの理解は出来た。

18歳をなめるな（精神年齢）

だけど前述にあつたとおりだし急いでは事を仕損じる、なんて諺だつてあるわけだけど時間は決して無限ではなくこの世界では何が起こるかは分からぬ。

ので、僕は基礎の8割がたの理解だけで次のステップに移ることとした。

それはすなわち

“風”の理解だ。

第6話 学（後書き）

小説つて本当に難しいですね。

実際にこの小説をどんな風に持つていくかも曖昧なわけです。
なのでそんな小説でも読んでくれる人に僕はとても感謝しています。

次話は第7話 研 なのかも知れません。

ここまで読んで頂きありがとうございました。

第7話 研（前書き）

なぜいつもほぼ毎日更新できているのか。
それは僕が暇人であり部活なんてものに入っていないからです。
第7話 研 です。どうぞ。

風の理解を深める上でもまず「空氣」について考えた。

空氣の大半の約8割を占める窒素、人やその他の人らゆる動物に不可欠なもので約2割になる酸素。

その他には微量過ぎてほとんどないにも等しい物質で一酸化炭素やたしかアルゴンとか言つ物質も含んでいたはず。

けど、アルゴンはなんだつたつけ。

光る物質だつたかそんな事が書いてあつたはず。

まあ、置いておく事にする。

他にもいろいろと含まれていたりするけどこれも置いておく。

例外として水蒸氣も含まれていたりする。

だが、乾燥している空間では含まれない。

湿っている場所では存在するけど。

ともかく、それら諸々が集まつて空氣と呼ばれる。

通常、生き物は生活する上で空氣体であるため空氣 자체を意識したりする」とはあまりない。

だけど、生きる上では欠かせないものだ。

同じように欠かせない水は常温で液体として存在するので生き物から意識されやすい。

しかし、それに流れがある時には意識されやすくなり“風”と呼ばれるようになる。

もちろん毎日風が吹いているわけでもなく無風の時だつてある。

だけど人は一定の確率で風を感じる事がある。

人が歩けば近くの人も自分も少なからずそよ風を感じ人が走ればな
びく風を感じる事だつてできる。

つまり鍊金術を使わざとも人が動きさえすればそこに風が発生し、何より流れが生まれることになる。

それが俗に言う人の流れじやがないのかな。

ただ、人の動きにだつて限界はある。

その限界を超えた風を鍊金術により創り出すんだ。

「こつわくで一先ず僕は風の理解をする上でとても重要なことを思い出した。

練成陣なんて知っているわけもなくといふが風の練成陣なんてものが存在するとも思えなかつた。

ので、僕は一から考えてみてとりあえず書いてみることにした。

練成陣を創る上で大事なことは円と図形と文字だ。

そちらへんにあつた縦横30㌢位の紙を引っ張り出してきてまず紙いっぱいに大きな円を書いた。

うーん・・・風は空気が流れることによつて発生したものだ。

空気の成分は必要不可欠なものかな。

風の正体がどんなものであるかを書き図形を書きいつかな。

図形が先かも・・・。

その前に空気の成分を調べてこないとなあ・・・。

そこの僕はお父さんの部屋に這入る。

いろんな本がありなおかつ散らばつてこけど実は法則があつた。

お父さんは生物の研究はしてこなかつたらしくほんの奥底には生物に関する本がたくさんあつた。

なので上のほうには物理的なものもあつたけど化学の本もたくさんあつた。

その中でよつやく見つけたのが

「元素に関する身の回りにある物」

とかいう本だつた。

なんのひねりもない素直な本で助かった感はあつたけど早く部屋に戻らなくてはならない。

そういうえば2階の部屋はひざせりのよつだつた。

そんな僕の部屋は1階だ。

僕の部屋にたどり着くと真っ先にあの本を開き空気にに関するものを探していく見つけるとそれを一先ずノートに書き写していく。

窒素、酸素、アルゴンと一酸化炭素にその他の物質を合わせて全部で16個の物質が辺りには微量ながらも散っているといつわけだ。

だけどどんな風に練成陣を構築していくばいいんだろ。

空気の物質の量にも差はあるし。

その差を明確にしながら構築してみよ。

~~~~~

何とかできた。

試行錯誤の末にやつとだ。

それは手書きの上に丸なんて書き慣れててもいないので少々形がいびつだ。

僕が創つた練成陣は一重丸をつくり内側の丸を外側の丸に近づける。

そして丸と丸の間に窒素、酸素、アルゴン、二酸化炭素以外の物質の化学式を文字と文字の間が均等になるように書き入れる。

次に内側の丸の中に正方形を作りその中に今度はひし形をつくる。

その次に正方形の角に出来た隙間に窒素、酸素、アルゴン、二酸化炭素をそれぞれ書き入れる。

最後にひし形の真ん中に僕が頑張つて製作した台風の形をした「風」という漢字を入れる。

これで完成だ。

はつきり言つてこれで発動しなかつたらどうしよう的な感じはあるけどそれ以上に早く試してみたかった。

リバウンドは怖くない。

皮肉にも僕が傷つくことはないからね。

実際は再生するかどうかはコントロールできるわけだけど。

しなきや普通の子供じゃないしね。

とにかくすべては明日だ。

お母さんは町の友達の家に遊びに行くりしきしね。

お父ちゃんは二つも通つてゐるからしてこねんだらうか。

製作したその日に実験出来たらよかつたんだけど何せもつ夕日も水平の向こうに消えてしきそうになつてゐるしね。

ああ、早く明日にならないかな？

## 第7話 研（後書き）

頑張つて作つてみたオリジナルな練成陣。  
ペインントも使つて頑張りました。

試行錯誤に試行錯誤を重ねやつと完成してまだマシだと思ふるもの  
を・・・。

そういうえば主人公設定とかいるかな。  
原作が始まつてからにしたいと思います。

次話は第8話 究 7と8で・・・。

ここまで読んで頂きありがとうございました。

## 第8話 究（前書き）

今日も今日として最後終です。  
この名前すゝく打つのがめんどくさいです。

第8話 究 です。どうぞ。

今日やることとしていたお手製練成陣は置いておくことにした。

僕は練成陣を一先ず親の分からない様な場所に隠しておくとして、一トに空氣の氣圧の変化による影響やいろいろな公式を（お父さんの部屋から）本を漁つて書き込んでいった。

漁るだけでは駄目なので一般的な空氣の氣圧の変動パターンを計算していき割り出す。

空氣はもつひとつの方として大氣として言い方もあるけど氣圧に関する場合はちのちのちが適切かもしない。

氣圧も大氣圧つて言つてはいけないが正しいのかもしれない。

どつちも一緒にたはずだけね。

なぜ氣圧について論じるのかと云ふと氣圧は空の通り空氣の圧力だ。

この圧力は太陽などによる海上の水蒸氣蒸発によつて上昇氣流が発生する。

圧力は上から押されることで発生する現象であり上昇するなら圧力は下がつてしまつ。

その下がつた氣圧を“低氣圧”と呼ぶ。

更に「氣体」といえども上昇するの「限界」はあります。上がったものも落ちて来る。

それが下降気流であり上から押さえつけたという現象が発生するため気圧は上がる。

その上がった気圧が“高気圧”と呼ばれる。

当然、気圧がその場で一定するはずもなく必ず高低が変わつてくる。

そして気圧の差が生じるので押さえられていたものが解放される  
ように高気圧の空気が低気圧の領域に流れ込む事になる。その時に  
流れた空気が風の主な要因になつてゐる。

と本に書いてあつたからだ。

つまり鍊金術により気圧を上げ下げすることで風を発生させあまつさえそれをコントロールしてみせる！－

というのが僕の魂胆だつた。

という訳で僕が気圧と風の関係について調べた次の日。

僕の現在の所在地はなんと森の中だ。

森というより林かな。

「この木の木札はお母さんお母さんでお手洗いをしてお手洗いをしたことがあります。」

「お母さんでやつてきた。」

「おじいちゃん、ウイントスより先にある林へやつてあつた。」

「前にお母さんが近くに森とは呼べないが、大きな林があるの  
つて言つてこたからだ。」

「ちなみにいの言葉はまだ完璧とこつて言つておじいさんだ。」

「…言つ過ぎかな?」

「そこに入り（迷子対策のため田印は欠かせない）中止符が二つ  
いりで足を止めた。」

「おじいさんでいつかな…。」

「独り言を呟きながら僕は荷物を降ろす。」

「前にお母さんが買つてくれていたバッグだ。」

「そして必要なものを取り出し地面に置く。」

「今の季節は秋なので枯葉がこいつぱい落ちてこるのであまり汚れない。」

「持つて来たものは練成陣を書いた紙、僕のいわゆる研究ノート、そ  
してなぜかりん。」

「おやつ的なノリでお母さん渡された。」

・・・別においしいし好きだからいいけどね。

一先ずりんごはバッグの中に入れておきしゃがんだままノートを開く。

僕は忘れないためと秘匿のためにすべて日本語で書いている。

これであの國家鍊金術師のエドワード・エルリックも解読できないう寸法さ。

標準語が英語であり更にシンの文字も読めなかつたとなれば確実だ。

だけど、一番解読されそなのがシンの国人たちだ。

読まれることはないだろうが危険人物はリンとかいう細田だ。

だけどまあ、気にすることもないはず。

アメストリス人に読まれなればそれでいい。

さて、そして僕はノートの見直しの後に近くで手じろうな木の枝を探した。

家からもつてくれれば早いんだけどこも一応林だからね。

そこで1本見つけたところで僕は地面の枯葉をざかしながらきれいに練成陣を書いていった。

何度もか修正と書き直しの後、書き終えた練成陣を見直しどこか間違つてないかチェックする。

間違えてはいなかつた。

そして僕はついに練成陣を発動させる準備を終えた。  
緊張する。

だが、失敗を恐れていては始まらない。

ついに僕は頭の中でどんな風な「風」を発生させるかを考えた。

まず、無難に練成陣上に小さな竜巻を想像する。

そして、僕は練成陣に手をのせる。

すると、光が発生する。

練成反応だ。

光が治まる。

・・・失敗？

そう思つた。

しかし、なんと周りの枯葉が練成陣の真ん中に寄つてくるではないか。

なんと成功していた。

初めての練成で成功した。

僕は嬉しくてたまらなかつた。

だけど、その場で枯葉が集まつてくるが嬉しくてその場にしゃがみじつと見ていた。

どうやら風の速度が遅かつたため上にではなく横に伸びていた。

それでも風は発生した

それだけで成功といえる。

ただ、想像とちょっと違つっていた。

なんでだろう。

そんなことを考えていたからだろうか。

僕は近くにいた人に気付かなかつた。

その人物とは

「あの・・・そこで何しているんですか?」

!...びっくりした僕はすぐに立ち上がりながらのまゝに向いた。

するとそこには

「イシュヴァール人・・・?」

イシュヴァール人の男の子がいた。

## 第8話 究（後書き）

がんばつた。

僕がんばつた。

なので寝ます。

超特急で寝ます。

ちなみに気圧に関してはほとんど偶然です。

ウイキで見つけました。

次話は第9話 種 かもしだせんぜ兄貴。 もしくは姉貴。

突発性キャラ変わり。

ここまで読んで頂きありがとうございました。

## 第9話 種（前書き）

わーい、来週テストだっていうのに更新しちゃうぜー。

・・・大丈夫かなあ。

第9話 種 です。どうぞ。

イシュヴァール人。

褐色の肌に赤い目を持ちイシュヴァラ教という宗教を崇拜する部族。武芸に秀でていて一人でアメストリス人の大人10人をなぎ倒す実力を持つ人が多く存在する。

そのイシュヴァール人が多く在住する土地がここ東部地方であり正確にはイシュヴァール地方と呼ばれる。

さて、ここで僕はどう動くべきだろうか。

僕からあの子まで距離はあまり離れていない。

だからこそあの赤い目が見えたんだけど。

見た目は僕と年齢がそれほど変わらないと思う。

相手も僕が答えるまで動くつもりはないらしいのでとりあえず切り返してみる。

「君ここに何をしに来たの？」

「ぼ、ぼくはよくここで遊んでいてその途中で何か音がしたからこ

「今まで来てみると、君がいたんだ。」

・・・声がか細くて聞き取り辛い。

けど、遊んでいてつて言葉と音とか君とか言つてこぬか「ひうやひ  
彼は

「君はこの近くに住んでいるのか?」

と聞くと

「! ! ! うん。そ、そつだけど。・・・あ、君はアメストリス人  
だよね?」

何で分かつたの! みたいな反応してきたからこつちも驚いた。

近くじやないならわざわざここまで遊びに来てこいる事になる。

しかし・・・

「そつだけど・・・何?」

「い、いや、別に何も・・・。」

なんか内気な子だね。

喋りにくい。

「僕は別に人種の違いに差別的な何かを思つてこいるわけじやない  
よ。僕をそちらへんの馬鹿と一緒にしないでよね。」

「や、そつなの？」

「やつぱりやつこつ」とで聞こてきたのか。

今はアメストリス国と併合しているイシュヴァール地方だけ差別はあっていいんだらうな。

世界が変われば差別という言葉が人種といつ言葉に付きまとつことに変わりはないんだらうね。

同じ人間だといつのに。

「うん、そうだよ。」やあつたのも何かの縁だ。友達になつてくれないかな？」

「友・・・達？い、いの？ぼくなんかと友達で・・・。」

「そう卑下することもないと思つよ？友達つていつのは人種に係わらずどんな人ともなれるものだと思つてゐ。何より大切なのは心だよ。僕は心から君に聞いた。友達になつてくれる？つて。後は君がそれに応えてくれるかどうかだ。」

「・・・ほ、本当にいいの？」

「うん。」

「本当に？」

「うん。」

そして何かすゞ100点満点な笑顔になる田の前にいる男の子。

「それじゃあ、まず自己紹介といこうか。友達の第一歩だ。僕の名前はミクナつて言つんだ。よろしく。」

「ほ、ほくはクルートつて言つんだ。よ、よろしく。」

「うふ、よろしく。」

そのままお互いに手を握り握手する。

この世界で始めて友達を作つた瞬間だった。

しかし、前世では心も何もへつたくれもなかつたといつのに今更なんて偽善的なことを言つてはいるんだか。

またに心にも無いことを言つて申し訳ない気持ちでいっぱいだよ。

「いっぱいだ。」

だけど、嬉しいなあ。

将来、三十路になる事が決定付けられた仲間が増えるのは。

~~~~~

その後、時間も時間だったので（太陽の暮れ方で大体分かる）そのまま帰ることになった。

一週間後に会う約束をして。

ついでに家の「りんご」を一個クルートにあげた。

何かめっちゃ喜ばれた。

家に着くとすぐに練成陣の微調整を行いそのまま寝た。

そしてあれから1年後。

僕は4歳になつた。

身長もお母さんの胸まで来るよつになつた。

お母さんは「ミクナが構つてくれなくなつた。」とか何とか言つていじけているが放つて置くとして今日も僕はあの林まで走つていくのだった。

ちなみにクルートもやはり同じ年だった。

僕は林に着くとクルートを探し始める。

どうやらクルートは秘密基地らしきものを作っていたらしく僕もそれを拝見させてもらつた。

子供にしてはよく出来ている気がだと思つ。

それでも風が吹くと不安になるぐらいい揺れる。

安心設計ならぬ不安設計なんちゃって。

・・・・・・・・・・・・

そんなこんなで秘密基地までたどり着くとクルートを呼び始める。

が

「あれ・・・? 今日じゃなかつたっけ。」

秘密基地にいなかつたため辺りを捜索していると

「あ、クルート。どうしたの? 探したんだよ?」

「・・・・・・・・・・。」

「?・どうしたの?」

「・・・・・・・・。」

「?」

「?」

「え?」

すると僕の後ろからイシュヴァール人の大人一人が仁王立ちしていた。

そしてその人は言つ。

「お前がクルートの友達とやらか。」

とずいぶんダンディな声で話しかけてきた。

第9話 種（後書き）

あはははは。

この小説が何を目指して進んでいるのか僕にも分からないです。
原作に入れるかなあ。

僕も僕に期待することにします。

次話は第10話 友かなあ。どうだろつ。
ここまで読んで頂きありがとうございました。

第10話 友(前書き)

うつわー。

このじる寒いですよねー。
夏の時は冬が恋しかったのですけど冬になつてみると夏が恋しいです
よね。

第10話 友 です。どうぞ。

第10話 友

目の前のこの人の第一印象はやつぱり背がでかいの一言に尽される。
僕がまだ4歳だからといつ理由もあるんだろうけどそれにしたって
でかい。

お父さんよりもでかいかもしね。

そんな目の前の巨人に対して（比喩表現（笑））僕は答える。

「そうですが、あなたは？」

僕の予想からするとこの人はクルートのお父さんと思われる。

何よりイシュヴァール人だし内気なクルートも怯えている様子もな
いしね。

「私はクルートの父だ。」

やつぱり。

「そしてクルートの友達だといつことではお前がミクナとやらか。」

「その通りですけど・・・クルートから聞いたんですか？」

「いや、まあ、そういうことになるのか。実際はクルートの方から
言つてきたのだ。友達が出来たと嬉しそうに語つておつた。」

チラツとクルートのほうを見ると顔を赤くしながら俯かせていた。

そんなに嬉しかつたんだ。

「私も最初に聞いたときは嬉しかつたのだ。友達が出来てからとうもの毎日が楽しくて仕方がないといった感じだつた。以前はあの性格ゆえにいつも独りであまり外に行かなくなつておつたからな。だが、その友達がまさかアメストリス人だとは思わんかつた。人種を気にせず遊んでくれる人物という者が珍しくてしょうがなく私も一目見たくなつてなあ。つい、ついて行つてしまつた。すまんな。」

なにやらペラペラと喋つてくれたけど結局はクルートをストーカーして来たつてことになるんだろうね。

家族想いつて言えば聞こえはいいんだろうけど想いが重過ぎては重荷にでしかないだらうね。

いわゆる僕と友達の遊びを邪魔するなーつてやつだね。

でも少し気になる事が一つある。

「あなたたち家族の他に家族がいるんですか？」

「うん？ああ、いるな。確か私達を含めて10世帯ほどか。そのぐらいはいるはずだ。」

「・・・素直に話すんですね。もしかしたら僕とクルートの友達といつ関係だつて建前かもしだせんよ？」

「・・・ふふ、私にだつて人を見る眼ぐらしさはあるさ。なによりク

ルートが信じているというのに私が信じずにしてどうする。わつはつはつは。だいたいそんなことを言う奴が悪い奴な訳がないだろ？

「

単純な・・・。

しかもなんて自分勝手な判断。

なんかお母さんの尻に敷かれてそうな人だなあ。

まあ、それはそれとして。

「Jの近くに集落を作っているんですか。」

「まあ、小規模ではあるがな。1人がみんなのためにみんなが1人のために1つて感じでやつてている。」

「でも、なぜわざわざJに作る必要があつたんですか？イシュヴァール地方もそこまで離れてはいなははずですけど。」

「実はそのことだな。話があるのだ。」

「話・・・？」

「ああ。実は我等はある一定の場所に留まつて生活しているわけではなく放浪しているのだ。」

「だから10世帯という人数の少なさで生活をしているんだ・・・。」

「

「その通り。少人数であれば移動も楽になる。ただ、荷物を持ち移動するというのがなかなか困難なのだがな。そしてそのルールとして1年周期で移動をしている。」

• • •

「…もつすぐ一年目になる。とこうじ話をしたかったわけですか…」

「アーニー、どうだ。

ここで僕はクルートのほうを向く。

クルートはもう今にも泣きそうな顔で、こちらを見ていた。

「クルート。僕もね、友達がいなくていつも家で1人だつたんだ。」

実際は今の肉体的年齢で同年代に馴染めるとは思えなかつたから。

え・・・?

「僕はクルートと友達になつていつも楽しかった。」

「ぼくもつ、ぼくも楽しかった！」

「かくれんぼだつてしたし追いかけっこだつてしたね。」

「うん。うん。」

「途中でクルートがこけたりして痛そうだつたけど泣かなかつたよ
ね。」

卷之二

恥ずかしそうにだけど嬉しそうに笑う。

「そんな笑顔も僕は眩しかつた。嬉しいから笑う。楽しいから笑う。そんな君がうらやましかつた。だけどね、痛かつたら泣いて良いんだ。ぼくと君がお別れするのももうすぐだ。そんな感動的なお別れが涙なしではもつたいたい。」

L

号泣するクルート。

僕はそんな彼を抱きしめる。

しばらくして少し落ち着いたのを確認して僕は語る。

「だけど最後は笑いあつて別れるんだ。またいつか会えるって願いながら。そうすれば心も幸せになれる。」

「ひひひーひひく、ひひく、うん、うんーまた、また、いつかミク
ナと会えるよね?」

「もちろん。君が僕を忘れない限り僕も君を忘れることもない。だ

からまたいつかここで待ってるよ。

「うそ、うそ、ありがとう、ありがとう、まともにかかるの場所でミクナを待ってる。」

そう言つて涙と鼻水で顔をぐしゃぐしゃにしながらも笑うクルート。

。でも、やがて悲しみは去えられず、やがて顔を上げ続けていた。・・・

結局、クルートはそのまま泣きつかれたのか眠ってしまった。

「いやー、なんて感動的な別れなんだ。うわーーーい、おこおこねいおいー！」

おつさんか泣き叫んでもうるさいだけで 一切感動は伝わらないけど
感情的であることは伝わった。

「すゞ～～～！つは！んんつ！本当にお前がクルートの友達で良かった。子の幸せは親の喜びだからな。お前の親もさぞかしすばらしい人間なんだろう！」

「 そ う だ。 つ い で だ が 良 い こ と を 教 え て や り う。 我 等 は 5 年 に 1 度 は 故 郷 に 帰 る こ と に し て い る。 ち ょ う ど 今 年 帰 る こ と に な る。 そ し

てそこで1年が経つとまた我等は旅をする。我等は最初に西部を田指して進むことにしている。だから残念ながらここは最後に通ることになるのだ。すまんな。」

つまり彼が言いたいのは5年後にここに待つていればきっとまた会えると言いたいんだ。

「わかりました。ありがとうございます。その時には僕も10歳になりますか。先は長いですね。」

それから僕はクルートのお父さんとも別れた。

僕はそのまま家に帰ることになる。

僕は思つ。

今はまだ『今は離れ離れになるけどいつかきっとまた会えるよー』見たいな事を言えるけど僕の将来は決まっている。

この世界の未来さえ知つてこる。

知つてているが故に僕は悲しい。

クルートだけでなく僕の親ですらいつか一生のお別れをしなければならないのだから。

いずれ僕の成長は止まる。

そうすれば今の町に留まっておくわけにはいかない。

成長が止まる前に何が起こるかわからない。

この世界はそういう世界だ。

異世界はかつていい。

異世界は秘密がいっぱいで楽しい。

とか夢見ても悲しいだけだ。

別れといつものが悲しいとは思わない。

この世界の物語はそういう物語なのだから。

決まりきっている死を嘆いてもしょうがない。

それはそういう風になつていく“運命”なのだから。

だから僕は悲しくない

はずなの

に。

第10話 友（後書き）

僕は小説の完成度が低すぎて悲しい。

泣けてくる。

うえーん。

あはは。

後26年後に原作が始まります。

長いなあ（遠い目）

次話は第11話 教 だつたら良いなあと思う今日この頃。

ここまで読んで頂きありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4896x/>

風の錬金術師

2011年11月26日20時47分発行